

英語音読状況に関する一考察：日中中等教育における比較

その他（別言語等） のタイトル	The Lack of Japanese Students' Oral Reading Practice in Studying English
著者	滕 小春
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	12
ページ	73-83
発行年	2014-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/3310

英語音読状況に関する一考察

日中中等教育における比較

滕小春

The Lack of Japanese Students' Oral Reading Practice in Studying English

Xiaochun TENG

Abstract: Oral reading is an important and effective second-language learning technic. Especially, it can be a successful way for Japanese students to improve their oral English skills, because they usually have few chances to conduct natural conversations in English. However, so far, there have not been enough studies investigating whether Japanese secondary school students do enough oral reading when studying English. It is also not clear whether teachers utilize oral reading practice in secondary schools in Japan.

This study investigated these issues, and also compared the situation of Japanese students learning English with that of Chinese students learning English. It was found that Japanese students do not actively do oral reading practice as much as Chinese students do. Japanese students hardly practice oral reading in front of people or when alone. This study also found that Japanese teachers do not emphasize the importance of oral reading as much as Chinese teachers do. Although there are a number of Japanese teachers who instruct students to do oral reading practice, their instructions are not really understood or followed by the students. Another phenomenon is found in that, in public, Japanese students feel much more embarrassed to do oral reading than Chinese students, who think it is natural to do so. Thus, when encouraging Japanese students to do oral reading practice, it is necessary to improve their understanding on the functions of the practice, and to help them to overcome the embarrassment of doing the practice in front of people.

キーワード：英語音読、話し言葉、中等教育、日本人学生、中国人学生

1. はじめに

英語教育における音読の重要性は多くの外国語教育研究者が取り上げている（たとえば、

高梨・高橋, 1987; 高橋, 1991; 谷口, 1998; 鈴木, 1998、2009; 安木, 2001; 七野, 2006; 高橋, 2006、2007; 斎藤, 2012)。本論文における音読の定義は声を出して外国語の文や文章などを読むことである。音読は話し言葉の学習における効果的な方法の一つである。場合によっては、不可欠な学習法とも言える。正しい発音を身につけるために口や頬の筋肉を鍛錬する必要がある。また自分の意図した表現が無意識のうちに口から出るためにも、口頭練習する必要がある(谷口, 1998: 76)。したがって、話し言葉の習得においては、十分な発音練習をしなければならない。作動記憶における音韻ループ (phonological loop) (Baddeley, 1986) の効果により、十分な発音練習 (何回もの復唱) によって、その内容は頭に残り (久保田他, 2001: 136)。よく使われる表現を音読で練習すると、スムーズな会話ができるようになる (谷口, 1998: 76)。表現としての音読に上達することは、上手なスピーキングを妨げる様々な要素を除去するのに有効である (高梨・高橋, 1987: 147)。発音の練習は主に二つの方法がある。一つは会話である。人と外国語を用いて会話する際、その言語を発音することになる。もう一つは音読である。音読は学習者が練習したい内容を自由に選べる方法である。しかも音読は練習したいときにすぐ練習できる方法である。日本においては、英語学習者にとって英会話の機会がとても限られているため、英会話に使われる英語の発音頻度と発音量が発音器官の神経や筋肉を発達させるに十分ではない。それゆえ流暢な英語を話せるようになるために、音読は日本人学習者にとって不可欠な練習法である。しかし、中国出身の筆者は日本人学習者の音読が少なすぎるように感じている。他の中国人の言語教育者も同じ印象を持っている (たとえば、仇, 2012)。筆者の経験によると、中国では授業中教師は自分が説明する時間のほかに、学生に学んだ内容を復習するする時間も与える。中国の学生はその時間に声を出して文章などを読むことが多い。しかし日本では、声を出すよう指示しない限り、学生が音読練習することはまずない。また、中国では学校のキャンパス、川沿い、公園などの戸外で外国語を読む人をよく見かけるが、筆者は日本で一度も見たことがない。それで、中国人学習者と比較し、日本人学習者の方が音読の量が少ないのではないかという考えが筆者に生まれた。この印象は日本の現状と一致しているのか。日本の音読の状況について詳しい調査を行っていないため、本当に日本の学習者が行う英語の音読が少ないかどうか確認できない¹⁾。また、われわれが見ていたのは表層だけの可能性もある。日本人がシャイであるため、人の前で英語を音読しない可能性が高い。その代わり、彼らが自宅で音読を多く行うことも否定できない。そうであれば、日本人学習者のほうが中国人学習者より音読が少ないとは言えない。日本人学習者の英語音読の実情を把握するのは指導法の改善においてとても重要なので、詳しい考察が必要である。本研究は中等教育課程在学中に、日本の学生は中国の学生に比べ、本当に音読が少ないのか、戸外と自宅での音読が自然であると思うか (つまり、心理的に適応しているか)、学校で先生から音読に関する指示を十分に受けているかについて、調査を行って考察する。調査対象は地方国立高等専門学校 4、5 年生 56 名と地方国立大学の学部 1 年生 42 名、計 98 名、地方国立大学で勉強している中国人留学生 34 名である。日中両方の調査対象者は自国で中等教育の英語教育を受けた。

2. 調査

2.1 調査項目

調査はアンケートで行われた。調査項目は以下の通りである。中国人の場合には中国語のアンケートを用いた（付録を参照）。

中等教育を受けた間に、

先生に音読の練習は話し言葉の習得において不可欠であると言われたことがあるか。

授業中に学生全員に音読するような指示を受け、しかもその時間を与えられたことがあるか（先生の発音について模倣する練習を除く）。

先生から授業以外にも音読を練習するように指示されたことがあるか。

授業時間外に音読を行ったことがあるか。

自宅で音読することは自然であると思うか。

戸外（キャンパス、公園など建物の外）で英語を音読する人の様子を自分の国で見たことがあるか。²⁾

戸外で英語を音読することが自然であると思うか。

以上の質問において、調査対象者に肯定と否定の選択肢から二者択一で回答を求めた。

以上の質問を設定した理由は以下のとおりである。 から は学生の音読状況に影響を与える教員の指導要素について考察するために設定した。 は教員が音読の重要性を学生に指摘しているかどうか、 と は教員から音読指示を受けたかどうかを考察するためである。また を用いて学生の授業内の音読の実施状況についても考察する。ほとんどの外国語の授業では、学生が教員のあとについて発音練習する時間があると想定できるため、

から先生のあとについて発音練習することを除くことにした。それは、日中両国の学習について、ともにほとんど肯定的な回答しかしない恐れがあり、両国の状況について差が出にくいと考えられるためである。 より学生の音読実施程度について考察する。 と より自宅と戸外での音読が自然であると思う学生がどのくらいいるかを考察することで、日中両国に音読の文化があるかどうかを判明できる。学生が戸外での音読をする人を見たことがあるかどうかによっても、その学生がいる環境に戸外での音読文化があるかどうかとも推測できるため、 も用いて日中両国に戸外での音読文化があるかどうかを考察する。

2.2 調査結果

～ までは是非を問う質問である。以上の質問にわずかの「どちらともいえない」との回答（回答ルールに違反したもの）があるが、ほとんど肯定と否定の回答であった。その結果は、表 1 の通りである。各質問においては、中国人調査対象者の肯定的回答の割合のほうが日本人調査対象者より高い。フィッシャー確率検定とカイ二乗検定で、すべての質問において中国人調査対象者のほうが有意に肯定的に思う傾向がある ($p < .05$)。さらに

以外のすべての質問において、この傾向は有意に見られる ($p < .01$)。以下では、調査の結果について詳しく分析する。

表 1 ~ の各質問に肯定の回答をした日中調査対象者の割合のパーセント、肯定人数/否定人数、フィッシャー確率検定とカイ二乗検定の結果

日本人肯定の割合	64.8(3)	67.3(2)	68.4(3)	41.8(2)	37.8(4)	8.2	15.3
肯定/否定	62/33	65/31	65/30	40/56	35/59	8/90	15/83
中国人肯定の割合	98.6(1)	88.2	94.1	91.2	75.0(1)	91.2	69.1(1)
肯定/否定	33/0	30/4	32/2	31/3	25/8	31/3	23/10
p (: χ^2 検定)	0.0000**	0.0147*	0.0015**	0.0000**	$\chi^2(1)=13.039$ **	0.0000**	$\chi^2(1)=32.873$ **

* $p < .05$; ** $p < .01$; n.s. $p > .10$

「どちらともいえない」のような回答は 0.5 人として計算し、() でその人数を示している。しかし、フィッシャー確率検定とカイ二乗検定(片側検定)の正確性を確保するため、「どちらともいえない」を無効回答として再計算しなかった。したがって、調整後の肯定/否定は割合と合わない場合がある。

、 の検定対象になる数字はすべて 5 より大きいために、カイ二乗検定で検証した。

3. 分析

3.1 日中全体比較

以上の調査結果によって、まず中国人の英語学習者のほうが日本人の学習者より音読に馴染んでいることが明らかになった。教員からの指導や学生の積極性などにおいても、日本より中国のほうが音読を重視することが分かる。特に学生の授業時間外の音読実施率は日本より高く(: 91.2% vs 41.8%)、戸外での音読は中国で普通に見られる(: 91.2%)が、日本でほとんど見られない(8.2%)。フィッシャー確率検定の結果は、以上両項目において日中間に極めて有意な差があることを示した($p = 0.0000$)。戸外での音読が自然であると思う中国人調査対象者のほうが日本人調査対象者より有意に多い(: 15.3% vs 69.1%, $\chi^2(1) = 32.873$, $p < .01$)。したがって、日本では戸外の音読は心理的にほとんど受け入れられておらず、音読における日中の文化的な差がある。日本人は戸外の音読が見られないが、この不足分は自宅で音読の量を増やし、その穴を埋める可能性がある。しかし、学習者の授業中と授業時間外両方の音読においても、中国の学習者のほうが有意に日本の学習者を上回っている(: 88.2% vs 67.3%, $p < .05$; : 41.8% vs 91.2%, $p < .01$)。したがって、日本の学習者は全面的に中国の学習者より音読を行う割合が少ない。日本人は戸外でほとんど音読をしない(: 8.2%)ので、日本には戸外で音読する文化はほとんどないといえる。また、授業時間外の音読は主に自宅で行われると考えられる。これにしても、自宅でも音読をするのが自然であると思う学習者は日本のほうが有意に少ない(: 37.8% vs 75.0%, $\chi^2(1) = 13.039$, $p < .01$)。これは自宅での音読も日本の文化に馴染んでいないことを示している。日本に対し、中国では、音読は言語学習の日課として扱われ、音読は言語学習の一般的方法の一つであることが見られる。

日中音読における文化の差は、国語の音読の状況からも分かる。筆者は広島大学の日本人学生 54 名に以下の 2 つの質問をした。

- 1) 小学校では国語の教科書などを音読するための時間 (1 コマ相当) があるか。
- 2) 小学校の国語の授業で、児童全員に音読するような指示を受け、しかもその時間を与えられたことがあるか (先生のあとについて読む練習を除く)。

1) に対して日本人学生全員がないと答えた。しかし、中国で小学校から大学まで教育を受けた中国人留学生 14 名 (それぞれ異なる省の出身) に同じ質問をすると、12 名は小学校で国語の教科書などを音読する時間があったと回答した。残りの 2 名は覚えていないと答えた。2) に対して 36 名の日本人学生はないと答え、18 名はあると答えた。これに対し、14 名の中国人留学生は全員あると答えた。この 2 つの質問に対して、調査対象者の回答には日中で著しい差が見られる。フィッシャー確率検定の結果でも各質問において有意差がある (表 2 に参照)。

表 2 1) ~ 3) の各質問に肯定の回答をした日中調査対象者の割合のパーセント、肯定人数 / 否定人数、フィッシャー確率検定の結果

	1)	2)
日本人肯定の割合	0	33.3
肯定/否定	0/54	18/36
中国人肯定の割合	85.7	100
肯定/否定	12/2	14/0
<i>p</i>	0.0000**	0.0000**

* $p < .05$; ** $p < .01$; n.s. $p > .10$

2 名の中国人調査対象者は質問 1) に対して、覚えていないと回答した。この 2 人の回答は否定の回答として計算した。

この結果は、日中音読の文化における差 日本に音読の文化がなく、中国にはあることは、小学校時代からすでに国語の学習において生じていたとみられる。中国では小学校から国語の教科書の音読を促し、幼い時から音読が言語学習にとって当然の日課であると認識させている。一方、日本の学校では音読するための時間 (1 コマ相当) を設けていないため、小学校時代から中国の学生ほど音読の重要性や必要性を認識していないと考えられる。このような認識の違いは、後に英語を学習するようになったときの音読に対する考え方に影響を与えていると考えられる。

3.2 教員の指導

調査結果においては、もう一つの問題を考察する必要がある。日本の教員は中国の教員ほど音読を重視していない (、 、 : 64.8%、67.3%、68.4% vs 98.6%、88.2%、94.1%)

が、学生に音読の重要性を伝える教員が少ない（ 、 、 の肯定回答の割合：それぞれ 64.8%、67.3%、68.4%）。これにもかかわらず、実際に音読をしたことがある学生は 41.8% しかない。これに対して、中国の場合、学生の音読実施率（ : 91.2%）は 、 、 の肯定回答の割合（それぞれ 98.6%、88.2%、94.1%）と同様、高い。では、教員からの音読指導は学生の音読の実施にどのような影響を与えているのか。これについては、詳しく考察する必要がある。以下、調査のデータをさらに分析してみる。

アンケートの 、 、 の問は、教員が調査対象者の音読訓練を促す指示があるかどうかの質問である。それぞれの指示が日本および中国人調査対象者の音読実施との関連性があるかどうかを、相関検定で検証した。検定結果は表 3（日本人調査対象者）と表 4（中国人調査対象者）のとおりである。日本の場合には、音読が話し言葉の習得において不可欠な練習であると学生に伝えること、授業時間外の音読を指示することは学生の授業時間外の音読の実施に弱い関連性があることが、相関テストで分かった（ - : $r = 0.275$, $F = 7.87$, $p < .01$; - : $r = 0.237$, $F = 5.74$, $p < .05$ ）。教員が授業中学生に自由な音読の時間を与えることと学生の授業時間外の音読する時間との間に関連性が見られていない（ - : $r = 0.096$, $F = 0.90$, $p > .10$ ）。これは、会話の学習における音読の意義に関する説明が学生の音読実施の促進にある程度の効果があることを示している。また授業時間外の音読の必要性を指摘することも、学生に授業時間外の音読実施にある程度の積極的な影響を与えている。しかし、以上の指示は授業時間外の音読実施への影響がすべて弱い。また、教員が授業中学生に自由な音読の時間を与えることは授業時間外の音読実施に影響しない。中国の場合には、音読意義に関する教員の説明は学生の音読実施と中程度の正相関がある（ - : $r = 0.560$, $F = 14.59$, $p < .01$ ）。つまり、中国では、教員が学生に音読の意義を説明すれば、彼らに日本の場合より積極的な影響を与える。その一方、他の二つの指示（ 、 ）は学生の音読実施（ ）と関連性が見られない。その理由は、中国人調査対象者の 、 、 への高い肯定的な回答率から分かる。多くの中国人調査対象者は自宅と戸外での音読が自然であると思い、戸外で音読する人がよくみられることは、中国で自宅や戸外での音読文化があり、音読は中国で伝統的な学習法であると考えられる。音読は中国において伝統的な学習方法なので、教員からその指示がなくても、学生はその指示の内容を周りの環境から受けている。しかし、音読の外国語学習における意義について、一般の人は分かるわけではない。教育者また専門家からの説明（ ）があれば、学生は音読の意義が分かるようになり、授業時間外で音読の練習を行うようになりやすいと考えられる。以上の結果は、日本の教員の と の指示は学生の音読にある程度積極的な促進力を与えるが、まだ十分ではない。教員はこの二つの指示においてより効果的に工夫する必要がある。たとえば、音読で会話能力を身に付けた実例を学生に提示する。筆者は英語会話能力を習得した日本人学習者 3 名にインタビューをした。そのうち、二人は英語の通訳を経験していた。もう一人は国立大学で外国人の留学生に英語で授業を教えていた。三人ともに、英会話のレベルが高い。三人に英語をよく音読していたか、また音読は自分の会話能力の習得においてどのくらい重要であるかを聞いた。三人全員音読の練習をよく行っていた。また音読が会話能

力の習得において最も重要な学習手段であると言った。このような成功者の経験を学生に紹介すれば効果があると考えられる。

表 3 日本人調査対象者の各項目ペアにおける相関テストの結果

項目	<i>r</i>	<i>F</i>
-	0.275	7.87**
-	0.096	0.90 n.s.
-	0.237	5.74*
-	0.376	15.78**
-	0.279	8.10**
-	-0.045	0.20 n.s.
-	0.080	0.62 n.s.
-	0.349	13.30**
-	-0.257	0.99 n.s.

* $p < .05$; ** $p < .01$; n.s. $p > .10$

表 4 中国人調査対象者の各項目ペアにおける相関テストの結果

項目	<i>r</i>	<i>F</i>
-	0.560	14.59**
-	-0.114	0.42 n.s.
-	-0.078	0.19 n.s.
-	-0.061	0.12 n.s.
-	-0.097	0.30 n.s.
-	0.245	2.05 n.s.
-	-0.061	0.12 n.s.
-	0.134	0.58 n.s.
-	0.474	9.25**

* $p < .05$; ** $p < .01$; n.s. $p > .10$

3.3 その他

日中の調査対象者について、その他の関連項目の間に相関性があるかどうかを検定した。結果は表 3 と表 4 の中にリストとして挙げている。以下、その検定結果について分析してみる。日本人調査対象者については、 - 、 - 、 - において弱い正相関が見られて

いる（それぞれ、 $r = 0.376, F = 15.78, p < .01$; $r = 0.279, F = 8.10, p < .01$; $r = 0.349, F = 13.30, p < .01$ ）。したがって、日本の学生の音読実施が自宅での音読が自然であるという考え方と少し一致している。これに対し、戸外の音読が自然であると思う学生の人数は音読の実施との関連性が見られない（ $r = -0.045, F = 0.20, p > .10$ ）。これは戸外の音読は日本で極めて少なく、たとえ学生は自然であると思っても、見たことがないので、（戸外で音読をする）行動を実行しないと考えられる。これは - の肯定の回答において相関性が見られない（ $r = -0.257, F = 0.99, p > .10$ ）ことから推測できる。戸外で音読する人はたとえいても非常に珍しいので、見たことがあっても自然と思わないと考えられる。しかし、実際に戸外で音読している人の様子を見ると、音読したい勇気や原動力をもらえる可能性があるもので、 - においてはある程度の正の相関性が見られる。したがって、学生の音読を促進するために、指示だけではなく、実際に音読する様子を学生に多く見せなければならない。現状から見て、教員はその雰囲気や先に自ら作る必要がある。

中国の調査対象者に関しては、すでに言及した相関性が見られる項目ペア以外に、 - には中程度の関連性が見られる。中国の学生の傾向性が日本と異なる理由は、音読は中国ですでに一般的に受け入れられている文化のためである。中国には、戸外で音読する人が多いので、この多さは戸外で音読するのが自然であるという考え方に影響を与えるレベルである。しかし、日本では、戸外で音読する人は極めて珍しいため、見たとしても戸外での音読行為が自然であるという考え方に影響を与える臨界値に達していない。ゆえに、日本人調査対象者では - においては相関性が見られない。日中間のその他の項目においても、相関性があるかどうかの違いは同じ理由によると考えられる。たとえば、日本の学生は戸外で音読する人を見た経験とその行為が自然であるという考え方の間に弱い関連性がある。また、日本の学生には、自宅での音読が自然であるという考え方と戸外での音読が自然であるという考え方に弱い関連性がある。しかし、中国の調査対象者においてはそれらの傾向がない。

4. 結論

日本の英語学習者は中国の学習者に比べて音読の練習が少ないという印象がある。しかし、本当にそうであるか否かについての研究はない。日本の文化において、人の前で朗読するのは自然でないと思う可能性があると考え、日本の学習者の音読練習が少ないという印象は事実を反映していない可能性も否定できない。なぜかと言えば、人の前ではなく自宅で多く行う可能性があるからである。また日本の学生は学校で音読について指示を十分に受けているか、授業時間外の音読を自然であると思うかについての研究も少ない。音読に関する教員の指示と学生が授業時間外に行う音読が自然であると思うかどうかと、学生の音読実施に関連性があるのかについての詳しい考察もほとんどない。本研究は日本人の大学生、高等専門学校の学生と中国人留学生の調査対象者に対して日中両国の中等教育における学生の英語の音読状況について調査を行って考察してみた。調査結果から、中国人調査対象者と比べて、日本人調査対象者は、中等教育を受けた間に、英語の学習にお

ける音読の練習は確かに少ない。日本人調査対象者のほうが中国人対象者より音読が少ないのは、われわれの見るところ（たとえば、教室や戸外など）だけでなく、自宅でも日本人の調査対象者のほうが中国人の調査対象者より音読を行うことが少ない事実も分かった。本研究の中国人調査対象者は地方国立大学で勉強していた 34 名の中国人留学生である。調査対象者の数はそれほど十分ではなく、また地域別に厳しく分けられていないが、調査の結果から見ると、中国人調査対象者のほうが日本人調査対象者より、各項目の音読状況において、肯定的に答えた回答者の割合は極めて大きい（表 1 参照）。したがって、中等教育の英語教育において、中国の方が日本より音読を強調していることを示唆している。今回の調査結果は中等教育における学生の音読状況だけを考察したが、調査の結果は、大学生や社会人などの英語学習にも同じ傾向がある可能性が高い。中等教育の間にできた習慣はその後の学習スタイルに影響を与え続けることがあるためである。これについて今後の研究で確かめたい。

日中の中等教育に存在する音読実施率の差は、音読に対する中国の学生と日本の学生の心理的な受け入れやすさと大きい関係があると考えられる。中国人の英語学習者は音読しようと思うとき、社会などからの心理的圧力を感じない。日本に戸外で音読する英語学習者がほとんどいないことは、戸外での音読が自然であると思う学生が極めて少ない理由の一つと考えられる。日本人調査対象者は自宅での音読も自然であると思わないので、日本には授業外の音読文化が築かれていない。このせいで、彼らは戸外や自宅での音読をあきらめる可能性が高い。教員からの音読に関する指導は中国ほど多くなく、しかも日本の学生の音読実施は教員の指導との関連性が弱い。したがって、学生の音読を促進するために英語の音読文化を築き、授業中の音読指示を強化し、より有効な指導方法も工夫する必要がある。

注

- 1) 進研模試（2007）の英語の指導状況アンケートによると、時期別に重視する指導内容として、教師が音読を重視する順番は高 1、高 2、高 3 においてそれぞれ 3 番、6 番、9 番である（安木，2009 を参照）。鈴木（2007）も listen and repeat, read and look up などの教師の実施率について調査を行った。しかし、以上の研究は学生の自主的な音読練習に関してではない。本研究の主な研究テーマは英語学習者の授業時間外での自主的な音読練習を考察することであり、進研模試のアンケートおよび鈴木の研究テーマとは異なっている。
- 2) 調査を行う際に、調査対象者に「戸外」の定義について口頭で説明を加えた。説明は以下の通りである。「戸外」は、川沿い、公園、広場、学校のキャンパスなどを指す。「戸外」での音読は、川沿いなどで、声を出して外国語を読むことを指す。

参考文献

久保田章、磐崎弘貞、卯城祐司 2001.『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』（望月昭彦編著），東京：大修館書店

- 七野真希 2006. 実証的研究：パッセージの繰り返し提示と音読練習による重要語句・フレーズの再生への効果, 『第46回外国語教育メディア学会全国研究大会発表論文集』103-109.
- 仇曉芸 2012. 中国の英語学習法, 『英語教育』Vol.60, No.12, p. 38.
- 斎藤兆史 2012. 昔の達人たちの英語学習, 『英語教育』Vol.60, No.12, 35-37.
- 進研模試 2007. 『教科に関するアンケート結果報告冊子』ベネッセコーポレーション
- 鈴木寿一 1998. 音読指導再評価：音読指導の効果に関する実証的研究, 『外国語教育メディア学会関西支部研究集録』7, 13-28.
- 鈴木寿一 2007. 現場での実践研究の成果をふまえた音読指導を核とした効果的な授業の普及のために：音読指導の現状・問題点・対策, 『第33回全国英語教育学会大分研究大会提示資料』
- 鈴木寿一 2009. 「音読」こそがすべての基本：音読指導で生徒の英語力を向上させるためのQ&A, 『英語教育』Vol. 58, No.9, 10-12.
- 高橋愛紗 2006. 音声を用いたフレーズ・リーディングと音読が言語産出に及ぼす影響, 『第46回外国語教育メディア学会全国研究大会発表論文集』173-180.
- 高橋愛紗 2007. 音声を用いたフレーズ・リーディングと音読が言語再生と保持に与える影響, 『英語教育研究』30, 61-19. 関西英語教育学会
- 高橋正夫 1994. 『身近な話題を英語で表現する指導』, 東京：大修館書店
- 高梨庸雄、高橋正夫 1987. 『英語リーディング指導の基礎』, 東京：研究社出版株式会社
- 谷口賢一郎 1998. 『英語教育改善へのフィロソフィー』, 東京：大修館書店
- 安木真一 2001. フレーズ音読の効果と問題点, *STEP BULLETIN* 13, 84-93. 日本英語検定協会
- 安木真一 2009. バランスのよい英語力育成のための音読指導法とその順序, 『英語教育』Vol. 58, No.9, 13-15.
- Baddely, A. D. 1986. *Working Memory*. Oxford University Press.

執筆者紹介

氏名：滕小春（トウ ショウシュン）

所属：広島大学総合科学部

研究分野：第二言語習得、言語学、中国語教育、英語教育、日本語教育

Email: teng123789@yahoo.co.jp

付録：中国人調査対象者用の調査問題

以下是关于您在中国接受中等教育期间学习英语时的情况的问题。

- 1) 有英语老师告诉过您朗读是口语习得中不可缺的训练吗？
- 2) 在您所参加的英语课中，有过老师有规律地给过学生朗读时间的英语课吗？（不包括跟读（跟着老师读））
- 3) 有老师说过在课外也需要做朗读练习吗？
- 4) 您在课外朗读过吗？
- 5) 您在自己家里朗读时感觉自然吗？

- 6) 在戶外（比如校园、公园）看到过有人朗读英语吗？
- 7) 您感觉在戶外朗读英语自然吗？